



[記念講演]

## 「老いとどう向き合うか？」

**鷺田 清一**（わしだ きよかず） 大阪大学総長

[略歴] 1949年生まれ。京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位取得退学。関西大学文学部教授、大阪大学文学部教授、同大学大学院文学研究科長・文学部長、同大学理事・副学長等を経て2007年より現職。1989年に『分散する理性』『モードの迷宮』でサントリー学芸賞、2000年に『「聴く」ことの力』で第3回桑原武夫学芸賞、2004年に紫綬褒章を受章。

[著書] 『モードの迷宮』（ちくま学芸文庫）、『「聴く」ことの力—臨床哲学試論—』（TBSブリタニカ）、『「待つ」ということ』（角川書店）、『京都の平熱—哲学者の都市案内—』（講談社）、『思考のエッセンス—反・方法主義論』（ナカニシヤ出版）、『噛みきれない想い』（角川学芸出版）など多数。

皆さま、おはようございます。今日は、「老いとどう向き合うか？」というテーマでお話をさせていただきますが、これは主語が抜けていて、「誰が老いと向き合うのか」ということによって話は変わります。今回のニッセイ財団のシンポジウムは、副題が「みんなで高齢者の生活を支えるまちづくり」ということで、いわば支える側からのいろいろな議論がなされることと思います。私も「少子高齢化時代」「長寿化の時代」あるいは「介護の時代」とさまざまに言われる、高齢者が人口に占める割合が大きくなった社会で、高齢者を支えるという営みを私たちの社会がどのように取り組んだらいいかというお話をさせていただこうと思います。

私たちはまず、自分自身の老いにも立ち向かわなければいけません。立ち向かうといっても、そんなに気張って自分の老いに抵抗するのではなく、むしろ老いていく自分の大きな川の流れの中で、上手にあまり辛くないように泳いでいたいという思いもあります。本日は、随分たくさんの方に来ていただいている、ご夫婦でいらっしゃっている方も多いと伺いましたが、ご夫婦にはちょっと申し訳ないお話になるやもしれませんが、ご容赦願います。

自分自身の老いにどう立ち向かうかということですが、私はこれからいよいよ自分の老いを迎えることとなります。見かけは

老いの渦中にありますが、まだ老いに入りかけたばかりです。私は昭和24年の生まれですので、友人がちょうど昨年ぐらいに還暦を迎え、ほとんどの方は既に定年退職しております。

### 老後の過ごし方（時間つぶしに苦勞する友人）

友人たちを見ていると、例えば60歳まで大企業で勤め上げた方などは、老後の生活資金のことはそんなに心配されていないのかもしれませんが、時間つぶしにものすごく苦勞しています。比較的親しい友人で、朝、まるで出勤するように出掛けて行って、近くの喫茶店でモーニングを食べて、自転車でいろいろな所を回って、お昼は行きつけの喫茶店でドライカレーなんかを食べて、夕方には家に帰ってきてお花の手入れなどをして、家で夕ご飯を食べるというように、毎日市内ツアーと喫茶店巡りを繰り返している人がいます。朝起きたら「今日は何をしようかな」と思える生活というのはうらやましいと思いつつも、何となく想像するだけで切ない感じがしてきます。

その人は特に時間つぶしに困っている友人ですが、第二の就職に向かった友人や、あるいは定年前から介護の問題がかなり深刻になって早期退職した友人など、いろいろなタイプの友人がおります。今お話した友人は結婚をして40年近くになり、「自分はずっと家族と一緒に生きてきて、自分は

ほとんど家庭を見返ることもなく、仕事一途にずっとやってきた。自分としてはしっかりと家族も支えてきた。よく頑張ってきたし、家内も頑張ってくれた」と思っていました。だから、定年退職したら再就職はしないで、今までできなかったこと、つまり仕事のためにあきらめたことに時間を使いたい。例えば自分は若いときに美術部で絵を描いていたのだけれども、ずっと離れていたのでもう一度絵でも習ってみるかということと、それから何より家族のために時間を使いたいと思っていました。

ところが、奥さんの対応は全く想像を絶するものだったのです。奥さんに迷惑がられるわけです。「ぬれ落ち葉」と随分昔から言われていますが、この「ぬれ落ち葉」というのはなければいいのに、いったんひつつくとなかなか取れないという意味で使われます。この友人はそういう状態に近かったと思います。彼自身はぶら下がっているイメージではなく、家族のために自分の時間をできるだけ使いたいという思いだったのですが、奥さんの方からすると、「ぬれ落ち葉」としか思えなくて、迷惑そうに「今日はどこか行くところないの?」と言われるのです。彼はある意味で仕方なく、迷惑をかけないという形での家族貢献しかできないのかと思って、一日ぶらぶらするようになったようです。

### 夫婦といえども乗っている汽車は別

これは特に彼の方の一つの思い違いから発していることだと思うのです。というのは、例えば二人で一緒に三十数年家族生活をしてきて、家のことにあまり気を掛けられなかったけれども、振り返ると、毎日帰れば家族がいるし、定年になってもそのまま一緒にずっと生き続けるわけですから、同じ列車の席に二人並んで生きてきたと男

の方は思っていたのです。ところが、定年になってふと横を見たら、隣の座席に奥さんがいないという感覚です。しかし、夫婦というのはもともと別の人間ですから、次のように考えた方がいいと思うのです。夫婦とは最初から別々の列車に乗っている、これは当たり前のことです。出会うまでは別々の列車です。結婚するというのは、二つの列車の線路がだんだん近づいてきて、並行状態になって同じスピードでずっと走っているだけのことです。だから、横を見ればいつもいると考えた方が、結婚している最中も、あるいは老後もうまくいくのではないかというのが、友人を見ていて私が思ったことです。

### 隣の列車に奥さんが乗っていた

彼にどういうことが起こったかというところ、彼は一つの列車の二人席に奥さんと一緒に乗っていると思っていました。ところが、実際は隣の列車に奥さんが乗っていて、至近距離にあって、同じスピードでずっと走っていたのです。奥さんは専業主婦だったので、奥さんにすれば、夫は夜遅くまで残業をして、晩ご飯もほとんど外で食べてから帰ってくる。子どもは大きくなれば学校に送り出す。あるいは大学や就職となると、ほとんど家にいなくなってくる。そうすると、奥さんの方は朝の8時ぐらいから12~14時間、一人で過ごすわけです。介護などいろいろな問題があると、それはそれで大変なのでしょうが、もしそういうことがなければ、彼女は一日の半分以上を一人で過ごします。

そんな中で、自分の時間をうまく使えず、ただ家族の帰りを待っているというのはしんどいので、新しい友達のネットワークを作る、いろいろな趣味の活動をする、あるいは地域の活動に参加する。しかし、地域

の活動はどれもストレスがかかる。役などさせられると苦勞ばかりだからというので、それよりもむしろボランティアや趣味のサークルという形で、自分の一人の時間を上手にマネジメントして、むしろそれが楽しいというところまで自分を作り上げてきたわけです。

そうすると、二つの列車はスピードは一緒ですが、途中からだんだん線路が離れていって、定年退職を迎えた人が振り向いたら、奥さんは隣になくて、遠く離れたあちらの線路の窓に見えて、「おーい」と言っても声が届かないような距離にいるというようなイメージではないかと思えます。つまり、一人で楽しく生きるというか、自分なりの生活のスタイル、時間の使い方をうまく自分でマネジメントできたときに、急に線路が近づいてきて、自分の時間が今までどおり自由にできなくなるというのは、大変面倒なことです。そういうことが、その夫婦の中にひょっとしたら起こっていたのではないかと私は思いました。

### 心がけていること二点

私はいつも家内の顔を見て、今は隣の列車にいる人をガラス越しに見ているかのような気分で、注意深く対話をするようにしています。

私たちはたまたま一人っ子同士の夫婦なものですから、直接介護の対処をする人も4名いて、3名はもう亡くなりました。私も少しぐらい手伝いましたが、多くは彼女を中心に介護が回っていました。私が老いに向き合うときのことを考えて彼女がいつも忠告してくれるのは、「職業柄、気を付けなさい」ということです。先生と名の付く人は介護施設で一番嫌がられるというか、難しい種族だからです。これは教員だけでなく、弁護士でも政治家でも、漫才師

の方でも上に行くと「先生」と言われていますから、先生と付く人が来ると、介護施設のスタッフの方は考え込むのです。それほど難しいらしいです。先生と言われてきた人というのは、上から目線のようなものがあって、自分が間違っていることは認めないし、何か指示をするような言葉遣いになるそうです。そういう事を私はずっと言われてきましたが、果たしてどうなることやらと思っています。

自分の老いに立ち向かうというときに、体がどれくらい弱くなるかということは、(本当に体力は落ちていますが、本格的に杖をつかないといけないのはどういうことかとか、補聴器を付けるのはどういうことかというのは) 経験していないので、それについてはどう立ち向かうかはお話できませんが、最近はいわゆるリタイア直前を迎え、列車が2台ということと、先生であることを忘れるということの二つを心構えとしております。

### 介護をされる側の気持ちを考える

私個人の話はそういうことですが、介護とは単に高齢者とそれを世話する人の問題ではなくて、どの世代も同時に見舞われている問題であり、課題なのです。私の父親もそうでしたが、年を取ると「すまんなあ」という言葉が多くなってきます。うまくいっている介護でも「すまんなあ」という言葉が増えてきます。なぜかというと、老いるということが一番分かりやすく言えば、自分一人のできることが少しずつ減っていく。言い換えると、一人でできないことがじわりじわり増えてくるということです。例えば杖が必要になるとか、補聴器が必要になるというような、装置が必要になるということから始まって、やがて本当に誰かに体を抱えてもらわないと動けなくなる。

あるいは誰かに食事の手伝いをしてもらわないと一人では食べられなくなるというように、一人でできることがだんだん少なくなっていくというのが老いの形です。

別の言い方をすると、他人にしてもらうことがだんだん増えていって、自分が他人にしてあげられることがだんだん減っていくということでもあります。そうすると、それを口にするかしないかは別にして、どんな人でも家族や介護スタッフなどの周りの人に対して、してもらえばかりで、自分はしてあげられない、「すまんなあ」という思いが嫌でもどんどん募ってきます。それがやがて、「自分は周りに迷惑をかけるばかりで、みんなは良くしてくれるけれども、本当はみんな無理をして、しんどい思いをしてくれている。自分が誰にも迷惑をかけることなく、ろうそくの火が立ち消えるように死んでしまえたら、周りの人は本当は助かるだろうな」というような思いにステージが上がってくるのです。

さらにステージが上がってくると、「してもらえばかり、迷惑をかけるばかりで何もしてあげられない自分でも、まだ生きていてもいいのだろうか」というような問いにエスカレートしてくる。これは必ずしも意識してそのように自分に問いかける人でなくても、「自分はまだここにいていいのだろうか」という思いが心の中に知らない間にずっと堆積してくることがあるのです。そういう気持ちになるだろうと思います。

### 高齢者ばかりではない自己存在への疑問

ところが、老いを迎えた、老いの渦中にある人たちが抱え込んでしまう「すまないなあ」という気持ちが、定年を迎えた人たちや更年期を迎えた人たち、あるいは元気で会社で働いているはずの人たち、そして、これから社会に出ていく10代の人たち、あ

らゆる世代に同じ問いがにじみ出しているのです。今はそういうものすごく寂しい問いをみんなが抱え込むようになった時代なのではないかと、私はかねがね思ってきました。

例えば男性の場合、先ほどは奥さんとの関係を言いましたが、もう一つ、定年退職で嫌というほど思い知らされるのは、会社を辞めた途端、電話をしてくる人が激減する、あるいは「最近どう?」「どこか食べに行かない?」と誘ってくれる人、あるいは訪ねてくる人が激減するということを経験します。そのとき最初に思い知るのは、「これはおれの実力だ、自分にはこういう実力があると思ってきたけれども、あれは会社の看板の実力だったのか」ということで、「自分は人になんかすごい能力などそもそもあったのだろうか」というような、自分に何ができるのかよく分からなくなったという問いの形をとってきます。

あるいは、主婦の人を考えると、子育てが済んで子どもが遠い大学へ行ったり、あるいは就職したりして、やっと子育てから解放されたと思ったころ、大抵、自分の親たちの介護が始まるわけです。そういうすき間にふと見舞われる問いというのは、「自分はこれまでずっと人のためにばかり働いてきて、やっと自分の時間が取れると思ったころには、今度はまた自分の親の世話、それもなぜか私が中心にならざるを得ない。任されてしまうというか、押し付けられてしまう。一体自分の人生とは何だろう。私は一度でも自分のために生きたことがあるだろうか」ということです。また、そういうときに限って、自分が家族の世話をしてきたのに、家族からは疎まれたり、じゃま者扱いされるときもあります。「自分は一度たりとも自分のために生きたことがあるのだろうか」という問いに直面する

という人も、男女を問わず多かるうかと思  
います。

### 世の中から必要とされない辛さ

先ほどの定年の人は、会社のためという  
のは自分のためでもあると思っていたの  
に、実際に退職した途端、きれいさっぱり  
関係が切れるのです。あれは何だったのか  
という思いがあると思います。あるいは会  
社にいても、今の若年層は上が多いで、  
いつまでたっても若手や新入社員と言わ  
れ、5年たっても非常に単純な仕事や責任  
の軽い仕事しかできないケースがありま  
す。そして、自分の能力を高めようと思っ  
ても、好況のときのように会社がそういう  
教育のチャンスを与えてくれないので、セ  
ルフラーニング（自己学習）でやらざるを  
得ないのだが、それが十分できるほどの給  
料もないのです。そういう中で、自分の仕  
事に対して、「これは本当に自分がすべき  
仕事なのか」とか、「自分にとって意味が  
ある仕事なのか」とか、あるいは「誰でも  
できる仕事ではないのか。自分が辞めても  
きっと誰かが代わりにやって、会社はそれ  
で別に何も困らないような仕事ではない  
か」という疑問が、働いている最中に心を  
占めてくるのです。

最後に一番きついのは、今年などは大卒  
で50%強ほどしか就職が決まらず、高卒な  
どでも内定が決まっているのは50%台で  
す。そんな若い22歳や18歳の人たちのこと  
を思うと、きついなあと思います。就職が  
ないことも絶対にきついのですが、それ以  
上に、そんなに若い間から、自分は結局世  
の中から必要とされていないのだというこ  
とをものすごくストレートに突き付けられ  
るわけです。

今日の最初のおじいさんの話がそうです  
が、人間というのは、自分が誰かほかの人

にとって意味のある存在だと感じられない  
ときが一番、生きがいを感じられないので  
す。自分というものが他人の中に何か意味  
のある場所を占めているということが大切  
です。一番楽勝なのは恋愛対象になるとい  
うことです。恋愛だったら「ずっとそばに  
いて」「あなたがいなくて生きていけない」  
なんて言われることもあるでしょうし、そ  
んな人が「私はまだここにいていいのか」  
などという質問を自分にするはずがありま  
せん。そういう意味で、恋愛というのはみ  
んながあこがれるものです。会社で仕事を  
していても「やっぱりあんたがおらんとあ  
かんわ」「こんなときあんたがいてくれた  
らいいのに」と言われたら、こんな幸せな  
ことはありません。つまり、自分がここに  
いることの意味を他人がきっちり認めてく  
れているということで人は支えられている  
し、やろうという気にもなります。自分と  
いう存在が、周りの、あるいは一般の誰の  
中でも意味を持っていない、いてもいなく  
ても変わりが無い存在だということに直面  
するほど、辛いことはありません。

### 10代以前から選別を経験

お年寄りも、そのことを日々感じてしま  
うわけです。してもらえばかりで、自分は  
何もしてやれない、こんな自分でもまだこ  
こにいていいのかと感じてしまう。それと  
全く同じ問いを、今、10代の人が自分に向  
けているのです。世の中の誰も自分を必要  
としてくれないのではないかという実感  
の方がリアルになってきているのです。  
就職活動をして、40枚も50枚も、多い人は  
100枚も履歴書を書いて「要らない」と言  
われるのです。しかし、よく考えてみると、  
今は子どももそういう目に遭っているの  
ではないでしょうか。幼稚園のときから、お  
受験をするのだったらこういうところがいい

いとか、幼稚園に入るためのいろいろな習い事をさせられています。試験を受けさせられて、落ちたとき、その子は5歳にして、「この幼稚園は自分を要らないのだ、欲しがっていないのだ」ということを突き付けられるわけです。

そう考えると、戦後、それこそ私の世代以降は、早ければ10代以前から何度も選別ということを経験してきています。何度も何度もあなたの存在は要りませんと、自分の存在に不合格の判子をボンと押されるような経験を繰り返し繰り返ししてきたのです。そういう社会では、結局、5歳児ぐらいから死ぬまで、人はいつでも「まだ自分はここにいていいのかな」「自分がここにいて意味って何なのだろう」という、ある種、哲学的な問いでもあります。そういうものに強くぶち当たる人もいます。あるいは、そんなことを考えてはいけなさと自分を抑えている人もいるだろうし、全く意識していないのに、知らない間にそういう小さく微かな問いがどんどん溜まってきて、年を取ったときに、自分で何もかもできなくなったときにそういう問題に直面するというタイプもあるでしょう。問いとの向き合い方はいろいろな形があると思いますが、全世代が大なり小なりそういう問いを抱え込んでしまわざるを得ないような社会というのは、本当に寂しい社会だと私は思っています。

## 人生は24時間要介護で始まり24時間要介護で終わる

さて、いよいよ高齢者介護の話に入っていきます。高齢者介護というと、すぐ24時間要介護というふうに介護の度合いが上がっていったって、お互いに「なかなか大変になりましたね」などと話したりすることがあります。24時間要介護というのは、お年寄

りの介護に対してばかり言われますが、完璧な24時間要介護とは赤ちゃんのお世話と同じ状態です。赤ちゃんのお世話というのは本当に一瞬たりとも目が離せないし、寝ているときすら「息をしているかな」と見なければいけません。赤ちゃんは食べさせることはもちろん、体を洗ってあげること、うんこの始末はもちろん、そもそも移動することでもしてあげなければいけない。寝るということすら放っておいてもなかなかしてくれないので、寝かしつけないといけないということで、24時間要介護の一番典型的なものは赤ちゃんの世話なのです。

そして最期は、「そろそろ棺桶に入っておくわ」という形で死ぬ人はいないわけで、みんな死んでから棺桶に入ることになっています。そうすると、棺桶に入れてもらえないことには最後の儀式が始まらないのですから、それは誰かに担ぎ入れてもらうわけです。そうすると、どんな人も例外なく、24時間というか、完全要介護の状態でしか死ねないということになります。ですから、人間の人生というのは24時間要介護で始まり、24時間要介護で終わるのです。そして、その間は子育てや教育、家族を養う、介護をするなどいろいろなことがあって、頼り頼られる、あるいは支え支えられるという関係の中で一生ずっと動いていくのです。そう考えると、高齢者介護というのもその中の1ステージにすぎないわけです。

## 急激な寿命の伸びが課題を生んだ

それなのに1980年以降、特に「介護問題」というように、問題として語られるようになってきました。私に言わせれば、本来問題でも何でもない、人生で必ずいつかしないといけないことです。子育てと一緒にいつかしなければならぬし、されるしか

ないという、誰もが歩む、人として自然なプロセスの一時期です。それ自体は問題であるはずがなくて、人類誕生以来ずっとみんながやり、またやってもらってきたことが、なぜ我々の社会でだけ突然に問題として語られるようになったのでしょうか。介護問題、少子高齢化問題や年金問題など、老いの介護をめぐることは常に問題として語られることになってしまったのでしょうか。

一つははっきりしているのは、戦後、日本の社会では世界で例を見ないぐらい急速に平均寿命が伸びたということが特徴としてあろうかと思えます。ヨーロッパ社会が百数十年かけて達成した寿命の伸びを30~40年で達成したということで、ヨーロッパの約5倍のスピードで戦後社会は平均寿命を伸ばしてきたと言われています。そんな中で、定年の年齢はそんなに変わらないわけですから、要するに定年後の年齢がすごく伸びてきたということです。そうすると、会社勤めをする場合、現役の時代と老後の時代はほぼ拮抗するぐらいになっています。例えば20歳過ぎで就職したとして、55~56歳、あるいはせいぜい60歳で定年になりますと、残りが30年ほどあります。55歳で定年して85歳まで生きるとやはり30年ということで、働いている壮年の期間と、労働から下りたりタイアした老後の生活と言われる期間とが、ほぼ同じぐらいあるというライフサイクルになってきているのです。

### 老いの文化はできていない

そのように、定年退職後、あるいは子どもが手を離れた後の老後の時間が急激に長くなったのに、その時間をどのように過ごすかという前例もないし、戦後の何十年かで、会社に勤めるという形で働く以外の働き方や働く場所をきちんと用意してこられなかった。あるいは働くという形以外で充

実した社会生活に参加する、あるいは個人としての充実した生活を送るというモデルがまだ作られていませんし、仕組みも作られていないし、制度も作られていないというのが現状だと思います。

私はかつて『老いの空白』というタイトルで本を書いたときに、そのことに触れました。老いの文化というのは、つまり人類が初めて直面したことなのです。働くのをやめてから30年平均して生きるという人生の形は人類が初めて経験するもので、それにふさわしい文化がまだ全然できていないのです。そういう意味で、老いはまだ空白のままということがかつて論じたことがあります。

### 労働形態の変化が老後の役割をなくした

いわゆる会社勤めという労働の形が主流になる以前では、こんなことはあり得ませんでした。一例だけ挙げると、第一次産業の漁業などに加わっている人は、10代から見習いとして親の船に乗って、そして壮年になると自分で漁をして20年か30年頑張っていて、体力的にきつくなってきたら丘に上がって、今度は息子たちが取ってくる漁獲を受ける側に回るのです。しかし、それでも力仕事を朝一番からするのはきついという年齢になると、今度は家で網の繕いなどをする仕事をしたり、あるいはこの仕事は夫婦そろって水揚げをやっているわけですから、孫の子守りをするというように、生きている間はずっと仕事があったわけです。勤務という形の労働ではありませんが、自分がいないと全体が回っていかないという気分になれるのです。その形は人生の時期によって刻々と変わっていきませんが、最期まで自分の持ち場というものがありませんでした。ですから、持ち場がなくなるということが自分の人生も終わるということだった

のですが、今は持ち場がないままに30年生きなければならないのです。

今日、ずっと挙げてきた同じ人の例で言うと、定年退職したから会社という労働の場には自分の持ち場はもうなくなるわけですし、家に帰ってくると、奥さんの列車は向こうの方であって、旦那には家に持ち場など考えてもらわない方がいいと奥さんが思っているのです。せっかく家族の秩序があるのにややこしいことになるということで、家に持ち場がありません。では、外に持ち場を持つと思っても、これまでずっと地域社会との付き合いは家族任せにして自分でしてこなかったから、外に持ち場はないのです。仕方なく昔の仲間や新しく喫茶店で知り合った人などと何とかネットワークを作って一緒にやろうかと思うのです。しかし、例えば最近はよく、絵をまた描こうとか、バンドをやろうかという人でも、楽器を買うと金がかかりすぎるとか、絵の具もキャンパスも高いですから、年金のことを考えるとあまり勝手なことでもできないと思って、それをあきらめたりしています。そのように、いわゆる無縁社会ではありませんが、ふと足元を見たら縁が全部ないのです。社縁も血縁も地縁もなく、ベースキャンプがないということに気付くのです。それが辛いところです。

### **女性も存在の社会性を確認できない**

私は、そういう定年退職者のとりつく島もないような老後の人生に対して、女性を「自分の時間を自分でマネジメントする」ということを嫌でも身に付けた方々」として強く描きましたが、よく考えれば、我々の労働が通勤という形をとるということは、地域社会が労働の場でなくなるということです。地域社会が主として子育てと家族生活の場になってしまうのです。つまり、地

域社会が非労働の場になっています。そういう労働を免除されている社会空間の中で一日のほとんどの時間を生きるというのは、ものすごく辛いことなのです。つまり、主婦が「私も社会のメンバーの一人である」という社会性を確認しようと思っても、サークル活動や保護者の集い、地域の行事など、仕事や労働以外のところでしか社会性が確認できないのです。もちろんそこにも生き生きとした社会性は感じられるのですが、自分もこの社会の一員として支えているという感覚はなかなか持てません。

なぜなら、仕事の場合は、これを誰かがしないと世の中が回っていかないという実感がありますが、趣味やクラブ活動などは、いつもそれを一生懸命楽しみ、「また今度やろうね」と言いながらも、心の中で、これはもちろん楽しいことなのだけれども、別になくてもいいことだという思いがどこかにあるのです。ですから、自分が一生懸命世話役をやったり、あるいは自分が主人公として楽しんだりしていながらも、なくともいいものだという思いがどこか忍び込んでくるのです。つまり、労働でないもの、仕事でないものを通して自分の存在の社会性を確認するというのは、実はものすごく難しいことなのです。そのことが、専業主婦と言われながらも、主婦の人を本当の意味でしんどくさせている環境だと思っています。

### **現在の介護の実態と問題**

老いの世話、介護の問題が、私たちの社会ではどうして「問題」としてしか語られないのでしょうか。一つ分かるのは、所帯主がいて、その人がよその町へ勤めるという形で出掛けていくという労働の形態、そしてそれ以外の人、子どももお年寄りも含めて扶養家族という形で、その給料にぶ



ら下がる形で家族生活を営んでいるからです。言い換えると、高齢者と主婦と子どもは仕事には関わらないという近代的な家族像に、本当の無理の原因があるのではないかと思っています。

今の私たちの社会というのは、男女共同参画をいっていますが、現実はまだまだその名には程遠いものがあります。働き手がいるのに、いわゆる仕事の間はあまり与えられないのです。派遣や有期雇用、あるいはパートといった形でしか仕事先がないということです。つまり、働き手がいるのに働ける場所がない、チャンスがないというようなことが、別に問題でもないかのように長く繰り返されてきたことも、ものすごく大きな問題だと思っています。

だから、介護もいびつな形をとってくるのです。例えば介護の現実が家族の中に浮上してくると言われるように、まず家の中で嵐が吹き荒れます。これが異常なことであって、先ほども言いましたように、人は誰も、ある時期は介護をし、ある時期は介護をされるという形で人生を終えるわけです。介護自体は自然なことなのに、どうして介護という問題が浮上してくると家族の中で嵐が吹き荒れるのでしょうか。そして、嵐の吹き荒れ方というのは完全にステレオタイプというか、定型があります。

まず、家族のメンバーのうち誰が介護の中心に立つかでひともめするのです。その次に、一人でできるわけではないので、誰がどういう形でそれに協力するかという、家族行動の新たなシフトを考えないといけなくなります。また、家計の再配分も考えなければいけなくなるのです。その過程で何度も何度も言い合いが起こります。これまで家族関係のうちでかろうじて抑え込まれていたいろいろな不満やあつれきなどが、これを機に吹き出します。そういうい

ろいろな諍いを通じて別の新しい安定にまとまることもあれば、それをきっかけに家族関係が破綻してしまうというケースもあるかと思っています。とにかく家族に介護の問題が浮上してくると、嵐が吹いたようになります。

### 高齢者に対する高校生の印象

ある高校の先生からお伺いした話ですが、都会の高校で、先生が生徒に「自分のおじいちゃん、おばあちゃんのイメージというのはどういうものですか」という質問をしたら、一番多かったのが「おじいちゃん、おばあちゃんが来てから家の中がおかしくなった」と言った生徒さんたちだったそうで、先生はかなりショックを受けておりました。今のように核家族が中心になると、お子さんたちにとっておじいちゃんやおばあちゃんと一緒に住むというのは、介護が必要になってからというケースが多いのです。

年に1回お正月に会うとか、あるいはお父さんやお母さんの郷里に帰ったときにお客さんのようにして会うことはあっても、一緒に暮らすという経験がありません。おじいちゃん、おばあちゃんが家族生活を一緒にするようになるのは、介護が必要になったときです。そうすると、家族行動のシフトやパターンが変わって今までどおりかかないので、いろいろぎくしゃくします。お父さんとお母さんが言い合いをしたりすることが一挙に増えたとか、態度がよそよそしくなったとか、表情がきつくなったとか、子どもがじっと見ていて、おじいちゃん、おばあちゃんが来てから家の中がおかしくなったという印象を最初に持ってしまうという、何とも寂しい話です。でも、今の高校生では、そういう受け止め方は珍しくない先生はおっしゃっていました。

## 人は一人で別の一人を全面的に面倒は見られない

これまでずっと高齢者の面倒は家族が見るべきだという常識がまずあり、その中でも特に長男夫婦などが中心になるのが当たり前だという考え方がありました。その上で介護者に兄弟がいれば協力を求めるとか、家族や親族だけでやることが無理になれば施設に相談を持ち掛けて助けてもらうというような形で介護の段取りが進んできたというところに、無理があるのではないだろうかと思います。

これはすごく大事なことで、どんなケアについても言えますが、人は別のもう一人を一人でそっくり面倒を見るようにはできていません。一人で別の一人の世話をできるものではなく、人間というのはそんなふうにはできていないのです。そこから出発した方がいいということです。だから、一人のお年寄りを一人の人が面倒を見るなどということはあり得ないことだという前提から出発するのです。あるいは、一人の子どもを一人の親が全部面倒を見るということは絶対にあり得ません。健康な人同士でも、相手が子どもでなくても、たとえ家族であっても、24時間二人が一緒にいたら絶対に何か傷が発生します。そこから出発した方がいいのだと思うのです。

例えば、幼稚園や保育所、あるいはそれに通う以前の子どもを持っていらっしゃるお母さんは、実質的に核家族で、自分は仕事を辞めて育児に専念し、赤ちゃんが起きている時間のほとんどは自分と子どもだけだという関係を嫌でも持っています。お年寄りの世話をする場合でも、自宅でやっていらっしゃる場合は、そういう1対1のケアという形をとるケースが多いですが、人間というのは絶対にそんなふうにはできていないという前提から始めないといけない

のです。

## 共助システム・支え合いの仕組みが必要

昔は介護であっても、子育てであっても、手がいっぱいありました。彼(女)らにまず兄弟がたくさんいましたから、彼(女)らの子どもも妹が世話をしてくれたり、あるいは親の世話をするときでも、兄弟がいました。近所の人との行き来が当たり前でしたから、夫婦が留守にするときには隣の奥さんに子守りをお願いすることは当たり前のようなものでした。

私自身も子どものときには、「今日は隣でご飯を食べさせてもらいなさい」と言って、帰っても両親がいなくて、隣の家に上がり込んで隣の家族とご飯を食べるのは別に何でもない日常の光景でした。家の鍵も隣に預けておいてもらって、その鍵で自分の家に入るというようなことを平気でした。今ではそういうことは全くあり得なくなってきました。そのように、実際には手が足りないということで、子どもを一人で育てるとか、お年寄りを一人で介護する、あるいは責任を一人でひっかぶらざるを得ないようなことが異様であるということから、ケアの問題を考えないといけないと私は思っています。

現代社会で老いという本来問題でないものが問題として浮上する理由は、今言ったことが一つですが、もっとはっきりしている理由は、介護の問題が介護する側からばかり語られてきたことではないかと思います。そうすると、老いの介護の文化や仕組みがちゃんとできていないときに、誰か一人にしわ寄せがくるようなケースが多くて、もたなくなってしまう。だから問題になるのです。ですから、共助のシステムをしっかり作らなければいけない、支え合いのシステムやネットワークをしっかり

作らなければならない、介護費用の援助の仕組みをもっと整備しなければいけないというように、しなければならない問題がたくさん見えてきて、まさに介護が問題として語られるようになってきているのだと思います。

### 介護される側の声が聞けているか

私どもが介護の問題を考えるときに必要なのは、介護される側の声というものを私たちがきっちり聞けるような仕組みになっているだろうかということです。そういう声がしていることに気付きながらも、介護する側のいろいろなしんどい問題の方が先に前面に出てきて、高齢者が率直に老いというものを語るということが、機会としてすごく少ないような気がしてなりません。

私の父が施設でケアをしていただいていたときに、何かしてほしいことはないかと聞いても、「いい、いい」と言って何も言いませんでしたが、絶対にいろいろなことが溜まっていたはずだと思うのです。よくできた施設でありがたいという思いではいましたが、それでも例えば、「なぜあの年になって見知らぬ人と同室なのだろう」「6人か4人が24時間一緒にかなわないだろうな」という思いがありましたし、「どうして昼日中のこんな時間に他人と一緒にいる空間で、みんなパジャマ姿で嫌だと言わないのだろうか」「どうしてテレビとわずかな持ち物しかなく、まるで入院生活みたいな暮らしをしているのだろうか」「枕元にちょっと戸棚があるというような、病院に入っているのと変わらないたたずまいの中で一日暮らすというのは、どういう気持ちになるだろうか」と気になります。

もう少し重度の階に行くと、人が便意をもよおすのは人それぞればらばらのはずなのに、どうしておむつ替えは一斉にされる

のでしょうか。確かに歯がなくなっかみ切れないのかもしれないけれども、素の食材が分からないぐらいに細かく切られた惣菜を食べる気持ちというのはどんなものでしょうか。本当は何か言いたいのと言えないのだろうかなど一番思ったのは、体の筋肉を落とさないために、みんなで輪になってボール投げをする姿を見ていて、介護スタッフに幼稚園の先生のような声の掛け方をされて、子どものように「つかまえたー」「落としたー」「きゃー」と言っているのは辛いだろうなど、少なくともあれを辛く思っている人はいるだろうなどという思いがありました。

### お年寄りには強迫観念がある

もし彼ら、彼女らが現役のときにそういう目に遭ったらいろいろな不満を言ったはずなのに、お年寄りの方はあまりおっしゃらないですね。ちょっと勘ぐりすぎかもしれませんが、私が推測するところ、文句を言うと良いケアが受けられない、素直でないと良いケアが受けられないという、どこか強迫観念のようなものがあるのではないのでしょうか。それで多くのお年寄りが素直であること、あるいはかわいげがあること、若い人にかわいいと言ってもらえるようなおじいちゃん、おばあちゃんになることを、知らない間に自分に課しているのではないだろうかと思ってしまう。

ご本人には全く罪はありませんし、そういうコマーシャルを作った方には疑問を感じますが、「きんさん」、「ぎんさん」というのはまさにそういう方でしたね。素直でかわいらしいおばあちゃん、ついでにお金も稼いでくれるおばあちゃん。介護する側から言えばの話ですが、それは100点満点ですよ。しかし、人間というのは年を取ってから急に変わるものではないので

す。文句言いの人は10代のときからそうだし、意地の悪い人、物事をなかなかあっさりとは水に流さない人、怒りっぽい人、ずるい人など、そんな人はたくさんいます。皆さんの中にもそういう部分はあるので、年を取ってから急に素直にかわいくなんてなれっこないですよ。なれるのだったら、もっと早くからちゃんと直しています。

ですから、本当はものすごく言いたい思いがあるはずなのに、なぜかそういう声を出しにくいプレッシャーのようなものがあるのです。それが最初に言った、自分はしてもらえばかりで、何もしてやれない、申し訳ない、すまないという気持ちと共鳴してしまって、ますます老いについて当事者が自ら語るということをしにくくさせているような気がします。

## 人間に対する「評価」

最後に、介護の問題がお年寄りの介護という問題だけではなくて、私たちの労働の仕方、あるいはこの社会の福祉の在り方、あるいは人類としての課題まで、ものすごく大きな問題につながっているということをお話して終わりにしたいと思います。

まず1番目に、老いの介護の中に集中的に現れているけれども、それは我々の社会そのものの問題だというものが幾つかあります。その一つは、私たちの社会が人を評価するときに、「その人に何ができるか」「具体的にはどんな資格があるか」「どんな免許を持っているか」「どんな能力があるか」というように、何ができるか、あるいは何をしてきたかということでの人の評価をしています。これは履歴書がそうですね。履歴書には自分がやってきた仕事や学歴、業績、資格などを書くわけですが、私たちの社会とは基本的に人を評価するとき、人を値踏みするときに、その人に何ができる

か、どんなことをしてきたかで計る社会です。だからこそ、私たちの社会には試験というものが付きものになります。

このことを我々は当たり前のように、空気のように思っていますが、本当はこれ自体が正しいことなのかということを考えなければいけません。今、空気のようにこういう考え方になっているからこそ、お年寄りが年を取ったときに、「してもらえばかりで何もしてやれない、こんな自分でもまだここにいていいのだろうか」という問いが表れてくるわけです。つまり、もはや何もできない存在でも許されるのかという思いになってしまうわけです。これは本当に正しいことなのかということです。

## 福祉社会の「平等」と「尊厳」の理念

私たちは競争社会の中でそういう見方を持ってきましたが、実はもう一つ、それと正反対の理念も持ってきました。それは福祉社会の理念、平等の理念で、人は何もできなくても、ただいるだけでいい、そこにいてだけで価値があるというのが人間の尊厳という理念です。ですから、何もできなくなった人は、それで社会から廃棄されるのではなく、何もできなくても、人というのはいらただけで尊厳があり、価値があるのだというもう一つの理念を持っています。だから、我々は税金を納めて、どんな人でも最低限の生活が保障されるような仕組みを作ってきたわけです。

一方では、その人の実力で価値を判断するという、一方で、そういうことと全く無関係に人は人である、ただいるだけでその尊厳が認められるべきだという二つの理念をもっています。ある時代にはどちらか一方をものすごく重視し、ある時代はそれとは違う一方を重視する。ある社会体制はこちらを重視するし、ある社会体制はあ

ちらを重視するというような形で、我々が一番いい社会とはどんなものだろうと考えて、その都度実験もしてきたわけです。今の社会は、その人に何ができるか、どんな能力があるか、あるいはどんな業績を上げてきたかということで人を計る評価がはるかに優先するようになってきています。それが私の今日お話した、「みんな自分はまだここにいていいのか、ここにすることに意味があるのか」というすごく寂しい問いを、どの世代もが自分に向けなければならなくなった一つの原因になっているのではないかと思います。

## 地域社会の力

2番目は既にお話しましたが、かつては高齢者のケアから子育てや病人のケアまで、手がたくさんあり、家族の中にその作業が閉じ込められていなかったのです。もうお分かりだと思いますが、要するに地域社会にもっと力があつたのです。家族を越えてお互い支え合うような仕組みがあつたわけです。これは職住一致といって、働く場所と生活する場所が同じという昔の村落や町中の商店街などではしっかりと成り立つわけですね。男も女もあらゆる世代が町の同じ空間にいるのだから、よその子が毎日通学するときに、「今日はあいつ一人だな」「このところ、あの子は元気がないな」と誰かが見ているのです。誰かの目に入っているから、倒れそうになっていると「何か手伝おうか」という声も掛けられます。

ところが、今のマンションの生活、あるいは集合住宅の生活というのは、家族が孤立していて、私が今言った、横目で見るとか、見ないふりをして、ちゃんと見ているという視線が働かないのです。まず、所帯主は全部よその町へ働きに出ているし、家庭は戸づつ鉄の扉で隔離されています。

それから、水平だったら動けば誰かに会いますが、関係が垂直になっているので、エレベーターで会うか会わないか、オール・オア・ナッシングなのです。見ないふりをして見ている、見ているふりをして見ないというようなグレーの眼差しによる人々の接触が起こり得ない仕組みになっています。ですから、地域社会ということを考えてるときも、まず住み方の仕組みから考えていかないことには、心構えだけでどうかなるものでもないのです。

## 人間としての存在意義

最後に、もっと大きな問題は何かというと、介護が本当に私たちにとって、お互いにありがたいと思いながら、ありがとうと言いつつ、人々が時にケアする側に回り、時にケアされる側に回るというケアの仕組みというものを、いかにまっとうに充実して動かせるかということです。これは人類の使命がかかっているとすら言えると思います。なぜかというと、人間の定義に関わることだからです。

皆さんご存じのように、人間には定義があります。例えばホモサピエンス、ホモファール、ホモルーデンス、ホモロクエンスの四つがよく言われます。これは、人間と他の生き物を区別する基準は何か、つまり他の動物にはなく人間にしかない能力は何かと考えたときの人間の定義です。ホモサピエンスというのは「知る人」という意味で、「知性があるということが人間の特徴だ」ということです。ホモルーデンスというのは、「遊びやゲームができる、ルールを作って遊べるというのは人間だけだ」という考え方です。ホモファールというのは、「道具を作れる、道具使用ができる、つまり労働ができるということが人間の特徴だ」という考え方です。ホモロクエンス

というのは、「言語を使うのは人間だけだ」という考え方です。

### 人間は「ケアする動物」

この四つで人間が人間である本質を人類は考えてきましたが、私が一つ付け加えたのは、「ケアする動物」という考え方です。これは私のアイデアですが、あるとき動物学者に「間違っていないね」と聞いて、99%ぐらいまではそう言っていいとお墨付きをもらったのですが、哺乳類はどの生き物も子育てをします。おっぱいをやり、えさを食わせ、連れて回るというケアをします。しかし、他の動物はみんな先に生まれた方が、後に生まれた幼い者をケアするのです。ところが、人間だけは後に生まれた方が先に生まれた者の世話もするのです。これが介護ということです。後で生まれた者が先輩の世話をするというのは人間だけです。介護というものが実は人類学的な本質につながるのだと言える理由がここにあります。

猿は先輩を立てるといような生意気なことをちゃんとやることがあるそうですが、しかし、介護というものは基本的にしないのです。ですから、後に生まれた者が先に生まれた者の世話をするという、人類だけが持つケアの能力というところに人間の本質というものの一つが表れているのです。私たちは介護を問題としてではなく、私たちが取り組むべき課題、向き合うべき、そしてよりありがたいもの、充実したものにしていくことこそ、私たちが正真正銘、人類の文明、文化を担ってきたのだというプライドにつながるのだと思います。

1時間10分も聞いていただいてどうもありがとうございます。これで終わります。  
(拍手) (文責：日本生命財団助成事業部)